導入教材

「ペンギンの防寒着」

＊前ページ参照

＋

本教材

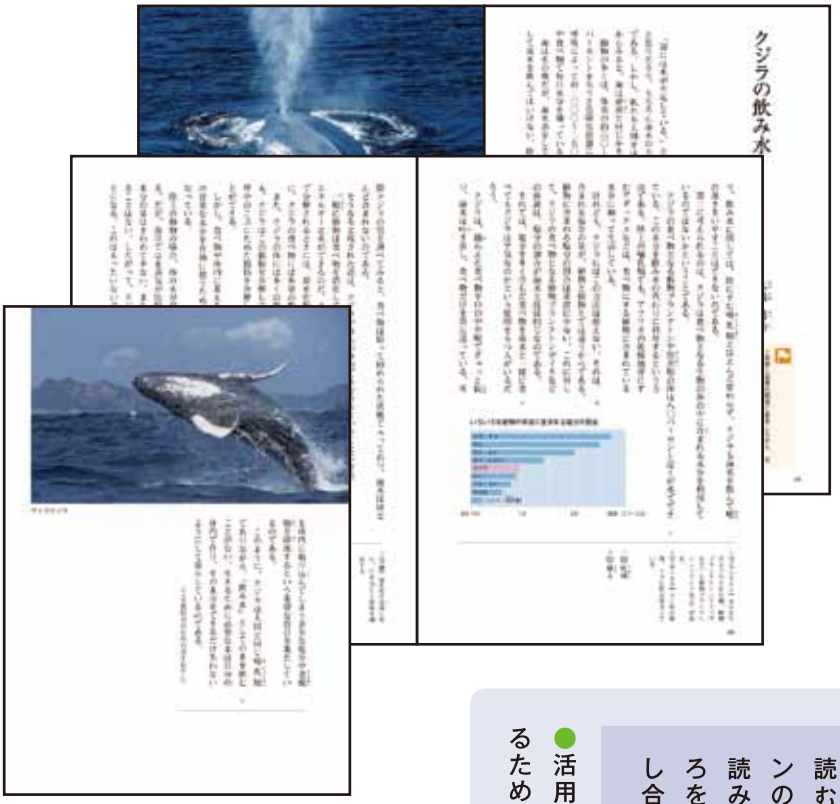
「クジラの飲み水」

「読み方を学ぼう①」

説明文の基本構造

題「ペンギンの防寒着」

●「ペンギンの防寒着」を用いて「説明文の基本構造」を確認し、次の本教材「クジラの飲み水」の学習へと進めます。



クジラの飲み水 学びの道しるべ

「クジラの飲み水」を読むときに、「ペンギンの防寒着」で学んだ読み方の、どんなところを活用したか、発表し合おう。

●活用した学び方を確認するための課題です。

■「クジラの飲み水」の「学びの道しるべ」の課題（一部）

セット教材で学び方を学ぼう

熊本大学 河野 順子

生徒たちはどうして自主的、意欲的に学ぼうとしないのかと、悩みを抱えている先生方も多いと思います。しかし、そもそも生徒たちは何をどのように学べばよいかということが分かっているのでしょうか？　また、生徒たちがこれまで学んできた教科内容（教科固有の知識や学び方）を生かした授業づくりがなされているでしょうか？

生徒たちが自分の既有知識をどのように活用できるかは大変に大きな課題です。ＰＩＳＡ調査で日本の高校生は習得した知識や技能を活用する力に課題が見つかりました。現在行われている全国学力調査でも、こうした力の育成が依然として課題となっています。こうした現状を受けて、学習指導要領では活用力の育成が重視されています。

説明的文章の学びを苦手とする生徒は多いといわれます。その原因の一つとして、教師から「要点は？　要旨は？」という一方的な問いかけのもとに文章構成の型を教え授けられるような授業が多いことがあげられるでしょう。このような知識伝達型の学びは生徒の主体的な学びを阻害してしまいます。

こうした現状に対して、私はセット教材による比べ読みが有効であると考えています。結論的に言えば、それは生徒たちに学び方を自覚させ、主体的な学びを実現すると共に、学校知にとどまることなく、生活に生きて働く活用力を育成することになります。

この際、説明的文章を学ぶ目的をどう捉えるかが重要です。私は次のように捉えたいと思います。

つまり、「説明的文章とは、筆者が生活、自然、社会、世界をめぐって何か揺さぶられること、広く訴えたいことがあって、それを読み手に伝えるために論理展開や表現を工夫している文章である」と捉えます。したがって、説明的文章の論理展開や表現には筆者独自のものの見方や考え方が反映されています。生徒が説明的文章を学ぶ目的は、こうした筆者の見方・考え方・述べ方に出会うことを通して、自分なりの見方・考え方・述べ方を形成することであると考えられます。

このように説明的文章の学習指導の目的を捉えると、説明的文章の学びでは、筆者の述べ方（論理展開、表現）に着目していくことが必要となります。

説明的文章の学びで児童・生徒につまずきが出てくるのが小学校三年生以降、つまり文章構造が複雑になってくるときです。こうした時期から、文章の基本構造をどう読み取らせるか、筆者の述べ方の工夫から筆者の見方・考え方をどう捉えさせるかという学習指導の工夫が必要となります。

平成28年度版『現代の国語』では、第一学年の説明的文章の導入にセット教材が設定されています。「ペンギンの防寒着」によって、生徒たちに序論の問題提起文を捉えさせ、筆者は、この問題提起を解決するためにどのような事例をどのような論理展開で述べ、結論部分を導いているのかを読み取らせることが重要となります。

本文は、「ペンギンたちはどのようにしてこの厳しい寒さをしのいでいるのでしょうか。彼らの体に備わった保温のしくみを探っていきましょう。」という問題提示文に対して、本論で一つめは羽根、二つめは保温のしくみとしての脂肪層の役割、そして、三つは羽根に塗る油という順序性の論理で結論部分が提示されていることを捉えさせることが説明的文章の学び方を学ぶうえで重要になります。

こうした学び方を学んだ生徒たちは、次の「クジラの飲み水」を深く読み取るために、まず筆者はどんな問いを問題提示文として提示しているのかを見つけることでしょう。すると、形式段落⑤段落に、「いったいクジラはどのようにして飲み水を得ているのであろうか。」という問題提示文を見つけるでしょう。そして、この問題提示文に対して、どんな事例がどのように論理展開されて結論が出されているのかという読み取り方への関心をもって読み取りを進めることとなります。すると、生徒はまず「このように、クジラは人間と同じ哺乳類でありながら、『飲み水』としての水を飲むことがない。生きるために必要な水は自分の体内で作り、その水分をできるだけ失わないようにして暮らしているのである。」という結論部分を見つけるでしょう。

この意外な結論に、生徒たちは、「筆者はどのような事例をあげて、どのように解明していったのだろうか」と筆者の論理展開を追うことになるでしょう。実は、筆者の論理展開を追うことは謎解きのような面白さを生徒たちに投げかけてくれるものなのです。

筆者の論理展開を追うと、生徒たちは、筆者である大隅氏は、「第一に考えられるのは、クジラは、塩分の多い海水を飲むことができるのではないかということだ」というように、自分たちも推論しやすい事柄から問題の解明を図ろうとしているということに気づくでしょう。そして、「第二に考えられるのは、クジラは食べ物となる生物の体の中に含まれる水分を利用しているのではないかということである」という推論へと続いていき、論展開の順序性には意味があることを感じ取るでしょう。最後に「クジラが自らの体内で水を作るということになる」という推論を出していることに気づき、自然の不思議さに驚きをもつことでしょう。第一教材である「ペンギンの防寒着」で順序性の論理展開を学んだ生徒たちは、筆者の問題解明の順序性に注目しながら学んでいくに違いありません。こうした学びが生徒たちに説明的文章の新たな魅力に気づかせていくことにもなるのです。

セット教材の学びは、筆者が自然や社会、人間、生活に対して、どのような問いを持ち、それをどう解明していったのか、その謎を解明する論究の面白さを生徒たちにもたらすのです。

かわの・じゅんこ

熊本大学教育学部教授。著書に『〈対話〉による説明的文章の学習指導―メタ認知の内面化の理論構築を通して―』（2006、風間書房）、『入門期のコミュニケーションの形成過程と言語発達―実践的実証的研究―』（2009、渓水社）、『論理的思考力・表現力を育てる言語活動のデザイン 中学校編』（2014、明治図書）など。